

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	大桃 佳純	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	SNS 場面における自己注目と攻撃的言動との関連 —他視点取得に着目して—
------	--

本文概要

【問題と目的】近年、ソーシャルネットワーキングサービス (Social Networking Service: 以下 SNS とする) を用いたネット上のコミュニケーションが増加する中で、SNS 上でのトラブルが問題となっており、近年ではネットいじめも問題となっている (文部科学省, 2008)。対面による攻撃的言動についての研究においては、他視点取得の傾向が高い人ほど言語的攻撃が抑制されることが明らかになっている (Richardson, Green, & Lago, 1998)。他視点取得と関連があるものとして自己注目 (私的自己意識) が挙げられる。自己注目には、非機能的な側面である自己反芻と機能的側面である自己内省の 2 種類がある (Trapnell & Campbell, 1999)。佐藤・吉田 (2008) は、CMC (コンピュータを介したコミュニケーション) は私的自己意識を高め、対面のコミュニケーションより攻撃的言動が増加するというを明らかにしているが、私的自己意識を自己反芻と自己内省に分けて検討していない。そこで本研究では、自己注目の自己反芻と自己内省という 2 つの側面から、他視点取得および攻撃的言動との関連について検討を行うこととする。

【方法】大学生 379 名に質問紙調査を実施した。①性別、年齢、SNS の利用の有無、利用時間②自己反芻・自己内省: Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ 日本語版; 高野・丹野, 2008) ③他視点取得: 多次元的共感性尺度 (登張, 2003) 「気持ちの想像」項目④攻撃的言動: 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ; 安藤他, 1999) 「言語的攻撃」項目③・④については対面場面・SNS 場面の両場面を想定して回答してもらう。

【結果と考察】他視点取得と攻撃的言動は対面場面と SNS 場面で差異があるかを検討するため、対応のある t 検定を行った。その結果、SNS 場面は対面場面に比べて、他視点取得が低く、攻撃的言動も低いことが明らかとなった。各尺度の下位尺度得点を算出し、SNS の利用時間低群・中群・高群ごとに下位尺度得点間の相関係数を算出した。自己内省においては、すべての群で他視点取得と有意な正の相関が示され、自己反芻は一部で他視点取得と正の相関が示された。さらに、SNS の利用時間低群において自己反芻は SNS 場面の攻撃的言動と負の相関が示され、自己内省は一部で攻撃的言動と正の相関が示された。他視点取得と攻撃的言動の間には有意な相関がほとんどみられなかった。自己反芻、自己内省、対面・SNS 場面の他視点取得の標準化得点を用いて、クラスター分析を行い、4 つのクラスターを得た。ついで、自己注目と他視点取得のクラスター 4 群と SNS 利用時間 3 群を独立変数、対面・SNS 場面の攻撃的言動を従属変数とする二要因分散分析を実施した。その結果、SNS 場面の攻撃的言動において交互作用に有意傾向がみられたため、単純主効果検定を行った。その結果、他視点取得高群において SNS の利用時間高群の方が SNS の利用時間低群よりも攻撃的言動が低かった。他視点取得高群は自分より他者に意識が向いている群であると考えられる。SNS 利用時間の長さが自分の投稿をみる人のことを考えて、何を投稿するかといったストレス経験の多さに関連している (佐藤・矢島, 2015) ことから、他視点取得が高いと何か気になることがあってもそれを主張するような攻撃的言動を控えることにつながるのではないかと考えられる。本研究の結果から、SNS 場面の他視点取得が対面場面より低いこと、SNS 場面の他視点取得には自己内省と自己反芻の両方が正の関連を持っていることが明らかとなった。したがって、SNS 場面における自分の言動に注目させることが、他視点取得につながるといえる。